

争論 脱プラスチック社会は可能か

生協とプラスチック問題 ～いかに、どこまで、減らせるのか？

風間 志信

日本生活協同組合連合会 職域生協事務局、前サステナビリティ推進部長

小野 光司

日本生活協同組合連合会 サステナビリティ推進グループ

聞き手：杉本 貴志（関西大学教授）



奥から風間氏、手前が小野氏

日本生協連の基本方針

【杉本】プラスチックが悪の象徴のように取り上げられる世の中です。マイクロプラスチックからレジ袋まで、それらによる汚染がマスメディアに盛んに取り上げられています。日本生協連としてこの問題への基本方針を示す、まとまった文章などがありますか？

【風間】「プラスチック包材へのコープ商品対応方針」をまとめてニュースリリースとして発表したものがあります（12ページ参照）。

私たちは、コープ商品というプライベートブランドを開発し、私たちの物流を通して各地の生協さんに買っていただくという、卸売りが主たる仕事になります。そこから、会員生協さんが組合員さんに小売りとして販売していくという関係になりますが、この方針はそのコープ商品についての考え方です。会員生協さんには独自の商品政策があり、その一部にこれが使われています。

方針の根幹は、国が昨年出したプラスチック資源循環戦略で盛り込まれている3Rと、リニューアブルを含めて4R、それとあまり異なるものではありません。3R

には順番があって、リデュース（削減）があり、リユース（再利用）があり、リサイクル（再資源化）がある。この順番が非常に重要で、この順で取り組むべきだということです。さらに最近の情勢としてリニューアブル、これは材質の置き換えなどで、たとえば植物性の原料にすることなどです。

【杉本】このなかでは2030年を目標とされていますが、これは国の政策にあわせているということですか？

【風間】基本的にはそうですが、日本生協連には、理事会の方針を定めるにあたって諮問をしてもらうための理事会付属の委員会があります。その中に環境サステナビリティ委員会というのがありまして、今、そこで環境・サステナビリティに関わる政策の整理をしています。まだ最終結論は出ていませんが、そこで「2030年の環境・サステナビリティ政策（仮称）」というものを作りつつありまして、来年2021年の総会で最終決定の予定です。

【杉本】数値目標のなかには「マイクロプラスチックを使用しません」というのがありますが、これまでコープ商品でもマイク

ロプラスチックを使用するということがあったのでしょうか？

【小野】化粧品で以前は使っていたようです。スクラブ洗剤だと、プラスチックの小さな粒子で汚れを落とすというのが昔はありましたが、それを無くしました。今はセルロース系の物もありますし、業界全体でも、日本生協連のコープ商品でも、使っていません。今後もそういうものは使わないということです。

【杉本】 いままで2万トンのプラスチック包材を使っていたが、これを25% (5000トン以上) 削減しますと書かれています。具体的にどのように減らすことが考えられますか？

【小野】 まだ、検討している段階だと思います。削減と言ってもそんなに簡単ではなくて、軽くするとか端を無くすとかだけではなく、もっとドラスティックに変えないと、この目標は達成できないでしょう。

目標の立て方のグローバルスタンダードは、出来る範囲でというのではなく、高い目標を立てて変えていく流れだと思うので、日本生協連でも高い目標を立てたという事です。25%というのは相当厳しい目標です。

【風間】 一つの試みとして例示すると、「ただの炭酸水」という商品があります。これはコープ商品で一番売れている飲料ですが、ペットボトルを軽量化、薄くすることにより、それだけで495トン削減できました。こういうことを、強度がある程度保てることが分かっている商品、特に売り上げの大きい商品でこつこつと行っていくということです。

表示は？ リターナブルは？

【杉本】 「あずみ野の水」でもラベルフィルムを本体から外して広く報道されましたね。別に本体にラベルが無くても、段ボールにちゃんと書かれていればいいじゃないかということで、水をまとめ買いする組合員としてもそれほど抵抗はないと思いますが、25%も削減するためには、一部生協では昔からやっているように、今までプラスチック容器だったものをガラスのリターナブル瓶にするとか、納豆のパックを紙にするとか、それなりに配送する生協職員にも、使用する消費者組合員にも、ある種の不便をかけるような方策も必要になるかと思うのですが。

【風間】 いろいろなやり方があると思います。その組み合わせでひとつひとつ目標を達成していきたいと思います。ただ、瓶は容易ではありません。一つは重いということです。これは運ぶ人たちにとって労働強化につながります。もう一つは、また使うためには洗わなければならないということです。一部の生協さんでは主力の調味料などでそれをやっていますが、洗うとなれば、水は使うわ、人手は使うわ、それを廻して行くための燃料や電気を使うわで、総合的に考えると必ずしも得策ではない場合もある。プラスチックの削減ということだけを見たら得策ですが、そういう事を総合的に考えないといけないかと思います。「あずみ野の水」のラベルのように、宅配で箱で買うのだから付けなくてもいいものは付けない、というのは抵抗なく受け入れられていると思います。

【杉本】 生協の場合は、半分は無店舗なので、必ずしも店舗に並べるようなラベルは必要

ないですね。

【小野】ラベルを半分にするとか、なくすというのは、機械を変えなくても出来る事なので、やれるところからやるということで「あずみ野の水」で始められたのだと思います。

【風間】生協には商品の細かい仕様、包材の材質など、出来るだけ丁寧に表示しようとしてきた歴史があると思うんです。表示が大切だという考えがあったので、それを無くそうという発想はなかった。でも、やってみたら「良いじゃない」となって、これからこういうものが増えて行くと思いますし、容器も極限まで軽くなっていくと思います。NB商品でも、昔に比べて水にしてもお茶にしてもペコペコと軽くなってきていますよね。



ラベルのない水（あずみ野）

ストローはどうなるのか？

【杉本】文書には、飲料ストローはプラスチック以外の素材に100%切り替えますとあります。いま、とにかくプラスチックのストローを使っているのは悪い奴だという風潮があるので、2030年、つまり10年後までにプラスチック・ストローはやめると

いっても、生協としてインパクトは小さいように思うのですが、この点では控えめな目標になっているのはなぜですか。

【風間】ストローだけを単体で供給しているところは、それを即座に紙に切り替えるところがあったり、紙もプラスチックも両方用意して選べるようにしたりすることができます。しかしここで言っている「飲料等ストロー」というのは、それだけでなく、紙パックなどにくっついているストローも含んでいるのです。

これは、紙だと、たとえくっつけたとしても、破かずに剥がすのがむずかしいので、容易に紙化することが出来ないのです。では、紙容器にストローを添えるのをやめたらいいかというと、あれは、小さい容器で容易に持ち運びが出来てすぐに飲めるというのが特徴の商品なので、ストローをなくしてしまうというのもあまり考えられない。とすれば、プラスチックと紙のちょうど中間的な機能を持っているけれどもプラスチックではないというものを、開発しないといけない。そしてそれをうまく紙容器のところに接着しないといけない。そういう技術的な問題が出てきます。

紙容器に充填する機械を世界的なメーカーがつくっているのですが、その技術力の発展にもかかっており、そのメーカーさんと一緒に、改良できないかとやっている状況です。世界的にすごく台数が多いので、少しずつ切り替わると思うのですが、その技術革新を待っているということです。そして、新しい充填機を飲料メーカーに導入してもらうか、改良するために費用を出してもらう必要が出てきます。うちが勝手に「はい、明日から変えます」って、言えないんですね。それで、これくらいの猶予期間が必要なのだと思います。

【杉本】レジ袋削減のように、生協が世間より一歩も二歩も先を行くというようなことは、ストローを切り替える場合には難しいということですか。

【小野】レジ袋などは、消費者に働きかけて進めていくことができたのですが、これは機械などの技術的ことが関係してくるので、素材開発その他、メーカーさんと協力してやっていくことであり、他より先んじてというのは難しいところがあります。

【風間】私たちは工場も持っていませんから…。ただ、「組合員さんが求めていることだから、早くやって下さい」ということは、私たちも言っていると思います。

内袋をどうする？

【杉本】そのほか、生協が事業をする上で、プラスチックが使われていて、その削減を考えないといけないというのはどういう場面でしょうか？ コープ商品以外で、どんな面で課題や改善点があげられるでしょうか？

【小野】会員生協のところで最も多く使われているプラスチックが、内袋です。そこが一番やるべきところです。ただ、これはなかなか難しく、「容器包装リサイクル法」という法律が出来て、その対象になっている事もあり、削減に取り組んできて袋を薄くするというのもやってきたのですが、その上でさらに減らすというのはなかなか難しいところです。ターゲット自体ははっきりしていて、それをやらなければ、やった事にならないのですが、削減というのはダイレクトには難しく、再生プラス

チックや植物由来プラスチックなどに切り替えるというのが最初に来ることではないかと個人的には思っています。ただ、コストの関係もありますし、紙にもできないし、今の内袋は中身が見えるし、においもある程度防いでいるので、その代わりになるものを探すのがむずかしいのです。

【杉本】生協の共同購入や個配といった無店舗事業では野菜や肉など注文した商品が薄い半透明の袋に入れられて組合員に届きますが、その内袋として使うプラスチックが一番多いので、その削減や代替品への転換が最大の課題であるということですね。あとはどうですか？ 配送に使う発泡スチロールなどは大きな問題ではないのですか？

【小野】今のところは大きな問題はないと考えています。量的には多くないと推測していますし、発泡スチロール自体はリサイクルに廻しています。やはり量的にとにかく多いのは内袋です。大きく見た場合には、日本生協連ではコープ商品の容器包装が大きな削減のターゲットになって、会員生協のところでは、一番大きいのは内袋です。あとはトレイや惣菜に使っているパックなどではないかと思います。会員生協さんのところで、プラスチックではなくて紙の容器というのが最近出てきているので、そちらを試しているところもあるようです。そのように代替する素材があれば試すことも出来ませんが、それが無いとなかなか進まない。ですので、世の中の技術開発を待たないといけない部分もある。気候変動という電気自動車のようなものですね。生協だけが先んじて、というのはなかなか難しいなあというところなんです。

情報発信、支援、交流

【杉本】内袋が最大の問題で、今後もっと良い素材が開発されるのを待たなければならないということですが、次善の策としては、リサイクルではないかと思います。この前も本研究所の会議で話していたのですが、多くの生協は配送時に内袋を回収しているのですが、ほとんどの人間はそのことを知らないという状況があるように思います。

【小野】内袋自体はおよそどの生協も回収していますが、回収率はだいたい30%くらいです。ちなみに紙の商品案内の方は60%の回収があります。

【風間】なぜ、内袋の方が30%でとどまっているのか？呼び掛けが足りないのか？ほかのプラスチックのごみと一緒に行政のゴミに出しているのか？うちの委員会でも内袋の回収率を上げようという話にはなっています。集めてしまえば、何らかの活用はされるので、もっと集めようよということとは話しています。

【杉本】そもそも昔は配送でも内袋なんてなかったわけですね。班にそのまま商品をまとめて持っていて、そこで組合員自身が仕分けをしていましたから。多少はあったかもしれませんが、ほとんど必要が無かった。個人別ピッキングや個配にして便利になった代償だと思うのですが、そういう歯車を元に戻すというのは、やはり無理なんではなか？

【風間】配送時に商品が個人別に袋分けされているというのは、すごくメリットがあるんですよね。そのまま自分の分を選んで

終わりですから。それともう一つ、安全上の問題になりますが、数年前ににおい移りがあるということで、コープ商品のカップ麺が薬品くさいという苦情を受けるという問題がありました。これはお店でもありうる話です。ストックしている棚が近いだけでもあり得ます。ですので、今、各生協では、化粧品やにおいを発する洗剤みたいなものと食品とは完全に区分けするか、最低でも袋で分かれている。そのことを考えると、内袋は無くせないですね。裸ですべて入れるわけにはいかない。もともとの発泡スチロール自体が器用に分かれていて、しかも重くないような、そんな容器が出てくると内袋なしでいけるのかもしれませんが。

【杉本】会員生協の側でも、配送時の容器や包装を改良するといった工夫を独自にいろいろされていると思うのですが、日本生協連はどういう立場にあるのですか？

【風間】交流を推進するという立場です。環境・サステナビリティ委員会でもその様な話はしていますし、宅配事業の委員会、店舗事業の委員会などで、そういう事を、どうしていこう、最新の技術をこう取り組んで行こうとか、自動車ももっと環境に負荷の無い燃料にしようなど、いろいろ検討する場があります。

【杉本】日本の生協は、各単協が主権を持っていて、中央（連合会）が言った通りの方向を一斉に向くというようにはなっていませんよね。環境問題についても、基本は会員生協の考え方があって、それを支援するというのが、日本生協連ということでしょうか？

【風間】何処まで行っても、それはそうだ

と思います。しかし、各生協が全然違う方向を向いているかということ、こと環境問題については、皆さんほぼ同じ方向を向いています。したがって全国の生協の方針を決めるのが困難かということ、そうではないと思っています。ただ、数値目標となると、「全国生協の数字」というのは積み重ねでしかないわけで、そう容易なことではありません。

それでも CO₂ 削減や再生エネルギー開発については、全国生協の目標が既に作られています。生協は厚生労働省の管轄ですので、1 年に 1 回、CO₂ 削減計画の進捗を報告できています。すごく大変なことなのですが、毎回、各生協さんがどこまで削減できたか、数値を集約して報告しています。ですので、プラスチックについても、コープ商品だけではなく、各生協さんの商品づくりや NB 商品などの販売、ペットボトルの回収について、どれだけ行いましょうという目標を立てることは理屈の上では可能ですが、大変な作業になりますので、それができるかどうかは委員会で話をしています。方向はあまり変わらないけれども、数値目標となると難しいというところです。

【杉本】 CO₂ 削減については国際的な枠組みが有り、日本もそこに参加していて、だから生協も参加してもらわないと困るという「上」からの大きな枠組みがあるから出来たと思うのですが、プラスチック問題も、やがてそうなるのでしょうか？

【風間】 昨年、プラスチック資源循環戦略で国としての目標を立てていますので、おそらく業界団体ごとに数字を出させて、それを点検していくという、CO₂ と同様な体制をとっていくと思います。

【杉本】 レジ袋については、生協は早くから削減や廃止に取り組み、多くの生協ではマイバッグの持参率が 9 割ほどになっていますし、地域によっては一般のスーパーを含めてそういう数字を達成しているところもあります。ところが、なかにはそこから今でもかなり遅れていて、持参率半分以下といったレベルの生協もあります。確かに単協の主権が大切だという立場に私も立ちますし、日本生協連があまりに指導的になるのも良くないと思いますが、こういう問題ではもう少し指導性を発揮してはどうかという指摘もあるのではないのでしょうか。

【風間】 指導という言葉は使いません。支援ですね。

【小野】 先生がおっしゃるように、生協は企業との比較や、会員生協内での比較というのが弱いと思います。一般的に、数値をとっていない場合もありますし、公表なども弱いと感じています。生協は他と比較することをしていない、自分たちがどのレベルにあるのかということ意識することが弱い、と私自身は思っています。

【風間】 今はまだ弱いですが、横に情報を流していくのは日本生協連の使命だと思っています。

政府と世論への発信

【杉本】 内部での生協同士、横への発信だけでなく、外部を含めた縦というか、「お上」への発信はどうですか？

【風間】 この間レジ袋有料義務化の運用方法が最終確定する前に、日本生協連名でレ

ジ袋の運用についての意見書を出しました。レジ袋の検討委員会というのがあり、パブリックコメント募集がありましたので、役員会の確認を経て公表しています。今回、最終的に国の運用がガイドラインという形で出されましたが、私たちの意見が反映されなかった一番大きな点として、素材によって有料化の例外が設けられたということがあります。有料化の対象から外していいという例外を設ける必要はないというのが私たちの意見だったのです。例外を設けると、それはゴミとして出されてしまいます。

それよりも全部有料化して、リデュースを大切にする、出さない、使わせない、という方向に持っていったほうが良いと思います。そうしないと、チェーンによっては、例外に該当するレジ袋を作って、そっちの方向で進めていく方向に行ってしまいますので、それは避けたかったのですが、いくつかの業界からの意見もあり、例外が設けられてしまいました。植物性であれ、なんであれ、ゴミで出てしまいますので、ぜひ、どこかの段階で例外はなくして欲しいと思います。今回のガイドラインに対する不満としてはそこが一番大きいと思います。

【杉本】 生協は今まで缶飲料の蓋を工夫するなど、環境問題で世間を一步リードしてきました。プラスチック問題でも、もう少し目立ったことをやってくれれば嬉しいと思いますが、先ほどのお話だと、技術的な問題があって、そういう工夫をする主体が生協から離れていっているということなんですね。

【風間】 ステーションタブも缶メーカーを巻き込んで実現してきたものだったんですね。

【小野】 あとは、やれるとすれば、回収したものをどのように商品に戻すか、それが出来ないようであれば海外等に出さない、ということです。それはもしかしたら事業的にもメリットがあるかもしれないので、進むかなとも思いますが、そこにも技術的な問題があります。たとえば、内袋は内袋に戻せたらいいと思うのですが、そこにシールが貼ってあるとリサイクルしにくいのです。

さらに最近、食品衛生法の中でポジティブリストというのができたようで、食品に接するプラスチックの規格が決められました。そうすると、リサイクルで内袋を内袋に戻すということに対して、またハードルが上がってしまいます。やはり技術的なところをクリアしないと先に進めないというのが私の感覚です。

連合会の使命とは？

【杉本】 連合会と会員生協の話に戻りますが、それぞれの会員生協は、マイバッグを持ってきてくださいと組合員に呼びかけたり、リサイクルのために一所懸命回収したりするところまでは出来ると思います。しかし、たとえば回収したものを再加工するようなことは、単協レベルではとても無理でしょう。おそらく単協の方々は、日本生協連がそういう点で各生協を支援して欲しいと期待すると思うのですがいかがでしょうか。

【風間】 商品としてリサイクルさせるのは私たちの責任だと考えています。実際、「生協さんが集めたペットボトルはきれいですね」とか「トレイも洗ってありますね」とか、

業界から期待されているところもあるんです。生協の組合員ではそれが常識ですので、原料・資源としてみた場合、自販機の脇から返ってくるものとは違って、生協のものは綺麗なのです。ですので、それがうまく回るようになればと思います。ただ、数字を見ると、悲しいかな、自販機からは大量に集まりますが、生協が集めているペットボトルは、リサイクルで回せるほどには量がないのです。もっといっぱい集めないと回らないと聞いています。ペットボトルからペットボトルに回す“ボトル to ボトル”が一番理想的なのですけれども、一部チェーンや飲料メーカーでそういうペット商品を出しましたと発表したところもありますが、まだ数少ないです。それは、それに必要な綺麗なペットボトルが手に入らないからです。それは裏返せば、ある程度汚くてもそこそこ綺麗なペットボトルが作れる技術が進歩してくれば、どんどん回るようになるということで、それに貢献したいと思います。

【杉本】 そのうち、「あずみ野の水」もボトル to ボトルで再生されたペットボトルになるかもしれないということですね。

【風間】 ただ、日本人は透明が好きですよ。あまり、色がついているものは使わない。少し色がくすんだものでも許容されるようにならないと、普及しないかもしれません。本当に綺麗なものをつくろうと思えば、本当に綺麗なペットボトルを手に入れる必要があります。私たちも今、チャレンジし始めているのは、ペットボトルから普通の包材を作るということで、そこからまず着手しています。それならペットボトルに多少劣化があっても大丈夫ですので、そういうところから始めています。

【杉本】 かつて赤くないウィナーソーセージなんて気持ち悪いと言っていた消費者も、生協のおかげでだいぶ意識が変わりました。ペットボトルは透明でないと気持ち悪いという消費者の意識も、慣れることですぐに変わるような気がします。ぜひ、そのあたりの広報を日本生協連にして頂ければと思います。

【小野】 すでに 1 割程度はペットボトル to ペットボトルが市場に出ているそうです。気にしないで飲んでる物もあるようです。

これからの リサイクルのあり方は？

【風間】 日本のゴミ行政は非常に縦割り、地域割りになっていて、都道府県で一斉に同じやり方でゴミを集めたりはしていないそうです。それは各市町村のレベルでやっていて、そこに業者さんもつながっているという形です。これを大規模に集めて大規模に処理するというやり方に改めれば、新しい技術の投資もできますし、コストの面でもクリアされてくると思います。

しかし現在は、こういうゴミ処理をされている業者さんはまだ手作業でやっている部分も多く、零細な業者さんも多いので、そういう業界の構造についても行政が入って変えていかないと、回らないのだと思います。

そこでリサイクルは中国やベトナムでやったほうが良いとしてきたのがここ何年間かですが、その中国やアジアから、資源ゴミの輸入を断られるようになりました。そうすると集めても持って行く場がない、

国内では誰もそんなことをやってくれない、というようにだんだんできてきています。

【小野】 日本生協連ができることはそれほど多くはないですが、方針作りは出来ることだと思います。リサイクルにおいて、商品開発して売る側と、それをあとから回収する側との思いが別々と感じます。商品を開発する側・売る側は売ることを目的にしている、回収する側は集めて売って、いくら儲かったということに関心がある。そうではなく、回収したものをもう一度使うということを両方が意識しないとリサイクルはうまく回らないと思います。その考え方を示すのが日本生協連の仕事なのかもしれないと感じています。

【杉本】 私はいくつか複数の生協に入っているのですが、そのなかには市民生協と呼ばれる大手の生協もあり、それよりも小規模だけれども環境問題などに強いこだわりを持つ生協もあります。ところが、そうしたこだわりの生協のほうが、紙のカタログのリサイクル回収が進んでいません。まだリサイクルをしていない生協や、ようやく今度リサイクルに乗り出そうという生協があるのです。事業でも運動でも意識はとても高いところなので意外なのですが、やりたくても出来なかったのではないかと想像しています。小規模な生協では、回収や、そのあとにリサイクルに持っていくシステムをつくるのが容易ではない。そういうところを連合会が手助けすることが必要ではないかと思っています。

【風間】 大きな生協さんや事業連合さんではリサイクルセンターというのを運営していることが多いですが、そういう施設を作

るということがその生協やそのグループではできなかったのですね。

【杉本】 その生協で面白いと思ったのは、そこはこだわりのある生協なので、日本生協連の取扱商品の中でも独自の基準により扱えないものがあるのですが、通販カタログ事業は日本生協連のものも扱っており、その中で自分たちの基準に合わないものは注文できないようになっているのです。そういうカタログを使おうという側も、逆にそういう使い方を認める日本生協連も、両方ともに度量が大きくていいなと思っているのですが、環境問題でもそういう形で、乗れるところは乗りましょう、一緒にやりましょう、という姿勢があればいいなと外から見ていると思います。

【風間】 たとえば生活クラブさんとうちの連合会とで、再生エネルギーの開発については一緒に委員会をやったり、生活クラブは先進的なことをされているので、新しい太陽光発電施設の見学に行ったりもしています。こういうことは「いいとこ取り」でいいと思っています。

【資料】

ニュースリリース「日本生協連、プラスチック包材へのコープ商品対応方針を策定」(2019 年 6 月 14 日)
(全文収録)

CO-OP News Release

2019 年 6 月 14 日

日本生協連、プラスチック包材へのコープ商品対応方針を策定 ～2030年を目標に、環境負荷低減の取り組みを加速～



日本生活協同組合連合会(本部:東京都渋谷区 略称:日本生協連 代表理事会長:本田 英一)は、2018 年に策定した「日本生協連 SDGs 取り組み方針 2018」を踏まえ、この度、2030 年を目標年とするプラスチック包材へのコープ商品対応方針を策定しました。

日本生協連では、コープ商品で使用するプラスチック包材について「リデュース(使用量削減)」「リユース(繰り返し使用)」「リサイクル(再資源化・再生)」「バイオマス(植物由来素材利用)」の 4 つの視点で環境対応の取り組みを推進しています。

この度策定した「コープ商品のプラスチック包材 数値目標」は、環境負荷低減に向けた取り組みをさらに加速させるものです。

「コープ商品のプラスチック包材 数値目標 ～2030 年に向けて～」

1. コープ商品開発においてマイクロプラスチックを使用しません。
2. 2030 年までに、容器包材のプラスチック重量ベースで 2016 年対比 25%※1 (約 5,195 トン)削減します。
※1 2016 年度コープ商品の包材に使用されたプラスチック樹脂の重量は 20,783 トンです
3. 2030 年までに、再生プラスチックと植物由来素材プラスチックの活用を進め、使用率を合計で 50%に引き上げます。
4. 2030 年までに、飲料等ストローはプラスチック以外の素材に 100%切り替えます。

コープ商品のプラスチック包材に関するこれまでの主な取り組み

- 年間 3,700 万本以上の出荷量がある「CO・OP ただの炭酸水」のペットボトル本体を 2017 年 4 月に軽量化※2 したことにより、2019 年 3 月までの 2 年間でプラスチック使用量を 495 トン削減しました。 ※2 1 本あたり 7g
- ペットボトルにラベルフィルムをつけないことで 1 ケースあたりのプラスチック使用量を 5.16g 削減した「CO・OP ラベルのない水(あずみ野)」を 2019 年 6 月 1 日に発売しました。詳細は 5 月 28 日発表のニュースリリースをご参照下さい。

日本生協連は、この度掲げた数値目標に向け、コープ商品のプラスチック包材の環境対応に積極的に取り組むことで、環境負荷の低減に努めてまいります。

<お問い合わせ先>

日本生協連 広報部

TEL: 03-5778-8106